

プロフェッションと素人

——ヒューズ・職業研究の可能性——

熊本大学 中川輝彦

1. 背景

E. フリードソンのプロフェッション論 (Freidson [1970]1988) は、E. ヒューズの「職業 (occupation)」研究 (Hughes 1958) の「理論的含意の体系的展開」(進藤 1990) を通じて構築された。ただし両者は理論枠組みを大枠で共有するものの、そこには微妙な違いがある。それはプロフェッションに対する「素人たち (laymen)」の集合的な眼差しの位置付けである。ヒューズはプロフェッションに対する素人の不信・疑惑を分析対象に含めた。これに対してフリードソンは、素人の眼差しを分析対象ではなく分析主体の側に定位し、その疑惑に導かれてプロフェッションを探求した。プロフェッションへの不信・疑惑を共有する人々を惹きつける独特の磁場を有する医療社会学の古典的著作は、こうして誕生したのである (中川 2019)。

そこには代償が伴った。フリードソンや彼に続くプロフェッション論は、素人の集合的な眼差しを研究対象として扱う術を失ったのである。素人の不信・疑惑やそこから生み出される怒りはプロフェッションをめぐる政治を左右する遠因となり、その地位の低下に役買ったといわれる (Freidson 2001)。プロフェッション、特に米国の医師の地位低下に伴う弊害が指摘され、プロフェッショナリズムの再評価が進められている現状 (Evetts 2012) をふまえると、この代償は小さくない。

2. 目的・方法

そこで本報告では、こうしたプロフェッション論の失われた可能性を顧みること、すなわちプロフェッションに対する素人の集合的な眼差しを視野に入れた理論枠組みの構築をめざす。ヒューズの職業研究に立ち返り、そこに断片的に残された彼の叙述は、表面上はシステムティックとはいえないが、たい諸論点を拾い集め、再構成することで、これを達成したい。

3. 結果・結論

報告を通じて、理論的には未整理のまま残されていた、プロフェッションに対する素人の集合的な眼差しを扱うヒューズの諸概念 (例えば「汚れ仕事」「罪深い知 (guilty knowledge)») を整合的に位置付ける枠組みが提示されるだろう。この枠組みは、素人たちの不信・疑念や怒りを視野に入れたプロフェッション論の展開に寄与すると思われる。

文献

- Evetts, Julia, 2012, 'Professionalism: Value and ideology', Sociopedia. isa. Freidson, Eliot, [1970]1988, *Profession of medicine*, The University of Chicago Press.
- Freidson, Eliot, 2001, *Professionalism: The third logic*, The University of Chicago Press.
- Hughes, Everett, 1958, *Men and their work*, Free Press.
- 中川輝彦, 2019, 「職業研究とプロフェッション論」, 第 45 回日本保健医療社会学大会報告. 進藤雄三, 1990, 『医療の社会学』, 世界思想社.